

美しさの認識を更新することで〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる —カリキュラムの連動と物語評価— ～抽象に着眼して、多義・多様に近づく～

造形科研究部

1 はじめに

あらゆる情報や物質、その選択肢にあふれる現代社会において、意味あるものや価値あるものを見出し、自分の生き方を豊かにしたり、自分以外の人の幸せを願ったりすることは簡単なことではなくなっている。しかし、造形科の本質を考えるこれまでの研究を経て、芸術を通して体験することのできるさまざまな価値観がこれらの諸課題を解決することができること、自己と他者の存在を認め、創造的な世界を構築する子どもを育てることにつながることを再認識してきた。そうした教科の社会的・教育的価値に対する自覚と自信を育みつつ、他教科のアプローチや学校全体で子どもを育てるための教育研究も心から尊重し、本研究テーマについて5年間向き合ってきた。

2 造形科における〈他者〉を楽しみ続ける姿

自分にとっての外部に、未知であり異質である〈他者〉を発見した時に、簡単に否定したり排除したりするのではなく、新たな価値を見出したり、楽しんだり、好きになったりすることは、人生を豊かにすることにつながるだろう。造形科の授業においては、形や色の新しいよさや美しさを発見することを通して、これまで無意識につくられてきた美しさの認識を疑い、より重層的で複合的で多義的な美しさの認識へと更新させることを目指す。その過程は、「今の自分」を否定するものではなく、むしろ子ども一人ひとりの「今の自分」がよいと思うものを出発点にすることで、子どもが教師から新しい価値を押し付けられることなく、色や形に関する新しい活動や経験に身を置けるようにしたい。自分にとっての〈他者〉との出会いを通し、今の自分が大切にされた実感と、前より少し新しくなった自分への気づき、自分以外の人や物ごとに対する認識の変容が波及し、授業の外にある日常生活につながっていくことが、「楽しみ続ける姿」だと考える。

造形科における〈他者〉を楽しみ続ける姿とは

「日常の中にある人や自然の（新しい）美しさやよさを見つけ、大事にしようとする（心が育った）姿」

3 授業づくりについて

よさや美しさの認識の更新を実現する授業づくりにおける「大切にしたい行為」について、これまでに次の4つに整理してきた。これら4つを満たす単元構成になるよう、意識して題材開発を行ってきた。

- (1) 新しい価値や感性との出会いがある
- (2) 選択と失敗ができる
- (3) 自分にとっての意味や価値を見つける
- (4) 自己受容・他者尊重、自己更新がある

4 「抽象」を軸にしたカリキュラムを編む

(1) 「抽象」と〈他者〉性

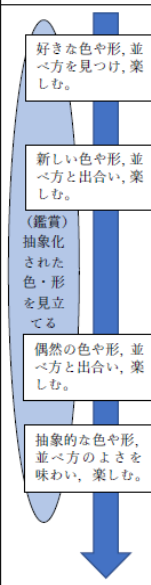
〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる造形科のカリキュラムを構想するにあたり、表現や鑑賞における「抽象」の概念および表現に着目した。そもそも〈他者〉に対し、否定的な感情が生まれる大きな理由の一つは、「よく分からなさ」である。自分の認識する領域内では説明のつかない、理解しがたい存在に人は不安や恐れを抱くものである。その〈他者〉性に近いものを感じる「抽象」とは、「その人」にしか分からない感じ方や考え方が含まれていたり、曖昧で不明瞭という側面を持っていたりする。しかし様々な複雑さを持つ「自分」を表す方法が、具体的で分かりやすいことだけで十分とは言えないし、事実の描写だけが真実に近づく方法ではない。また本来「抽象」とは、物事から要素を引き抜き、本質をとらえることである。形には見えにくい、「よく分からなさ」の中にある本当のことを大切にするための抽象への着目である。抽象に含まれる、新しさ、よく分からなさ、数値化・言語化しにくい、感覚的、即興的な表現の対象や表現の方法について着目して授業開発やカリキュラムを編むことで、自分にとって未知で一見不可解な〈他者〉を楽しみ続ける姿の発露につなげる。

(2) カリキュラムデザイン（「抽象を通した美の認識更新カリキュラム」）

抽象化に至るプロセスとしては、以下の4つを考えた。

- ①好きな色や形，ならべ方を見つけ，楽しむ。
- ②新しい色や形，ならべ方と出会い，楽しむ。
- ③偶然の色や形，ならべ方と出会い，楽しむ。
- ④抽象的な色や形，ならべ方のよさを味わい，楽しむ。

これらは必ずしも段階的なものではなく、6年間を通じてくり返し取り組むものである。また、「抽象化された色や形，ならべ方を見立てる」鑑賞の活動も重視する。

広大附小造形科 抽象化による 美の認識更新プラン	〈他者〉を楽しみ続ける子ども 日常の中にある人や自然の美しさやよさを見つけ、大事にしようとする（心が育った）姿					
	(1) 新しい価値や感性との出会い (2) 選択と失敗ができる (3) 自分にとっての意味や価値を見つける (4) 自己受容・他者尊重、自己更新がある ～メタ認知を働かせて～					
		造形遊び	絵や立体	工作	鑑賞教材	他教科との関連
	第一学年	「いろいろならべて」 (折り紙) 「ならべてつんで」 (積み木)	「わたしのたいよう」(バス) 「手ざわりのあるおはなし」(布) 「くるみの中に広がる世界」(絵)	「きってひろげてふしぎなよう」 (折り紙)	ブルーノ・ムナーリ 柚木沙弥郎(布コラージュ)、村上重土(文) たかおゆうこ(絵本)	算数(形) 生活(自然) 国語(物語)
	第二学年	「色水で初夏の色」 (色水)	「ビンの中のとからもの」(こすりだし) 「思い出の形」(型紙版画)		熊谷守一(絵)	生活(自然)
	第三学年		「にじんで広がる色の世界」(絵の具)			
	第四学年		「絵の具のぼうけん」(モダンテクニック) 「自分色紙でお話づくり」(カラージュ)		エリック・カール クレア・ヤングス	国語(物語)
	第五学年	「誰かからの手紙」 (紐・和紙)	「墨のうた」(和紙、墨)	「オノマトペの形」(糸綴)～形から心が生まれる～ 「段ボールで試してつくって」	楽曲 カンディンスキー 玉田多紀	音楽(題材コラボ) 国語(オノマトペ)
	第六学年		「光りの旅かげの旅」(色紙) 「はさみで絵をかくように」(色紙) 「詩と版画」(彫り進み版画)	ワイヤーアート(針金)	アン・ジョナス アンリ・マティス(切り紙絵) 詩 地方モニュメント	算数(対称) 社会(世界の歴史) 国語(詩) 理科(素材)社会(地域・歴史)

5 カリキュラムの連動

本校のように小学校での教科担任制は、各教科の専門性を深めることによる内容の充実を図れる一方で、各教科の学びの統合や関連付けを児童に任せるだけでは不十分な面がある。他教科や学校行事等との連動、教科で分断されない学びの連続性を意識し、より豊かな「越境」型カリキュラムへと進むことを目指した。

(1) 題材「墨のうた ～音と色と形をつないで～」第5学年(2022～2024)

音楽科と共同で題材開発を行い、教科を越えて鑑賞と表現にせまることで、鑑賞の質を上げ、表現の内容や方法を深めることをねらった。初年度はオーケストラ曲で行ったものを、次年度はクラスの合唱曲に変えてみることで、鑑賞する音楽と子どもとの関係性による表現の変化なども考察するなどした。

(2) 題材「ことばと思いを色と形に」第5学年(2022～2023)

シカゴの学校との国際交流を軸に、抽象表現を通した美の認識を更新する題材で、英語科との連携を図った。授業後の子どもの感想の中に、「相手に伝えるとき、字や言葉じゃなくても伝えられることや、芸術は言語だと思った。」というものがあり、色や形の表現で異文化の相手と分かり合おうとする新しさを経験する一方、相手の作品を鑑賞した後は、英語を使って感想を伝えようとするなど言語・非言語の両方の価値を感じる取り組みとなった。

(3) 題材「詩と版画 ～重なりやくり返しを味わって～」第6学年(2023～2024)

彫り進み版画における表現の中に、美の認識を更新させる新しさを見出し、表現と鑑賞を行う題材として開発した。詩の世界を表すことを主題に設定し、国語科領域との連動性を図った。

6 物語評価の実践(ヒロガル)について

本研究が子どもにとってどのような価値があったかを見取るために、評価の方法を模索し、物語評価を取り入れることにした。数値や指標などの科学的な方法だけでは取りこぼされてしまう、その子自身にとっての価値を見つけるために、一人ひとりの文脈で学びを語らせる記述シート「ヒロガル」を使った。

(1) 学校行事(作品展)におけるヒロガル(5年生)

- 他の人の作品に出合い、表現の工夫を見て、自分との違いや同じところを見つけることができた。作品の一つ一つに想いやその人の言葉が書かれているようで、すてきだった。
- その人の作品を見て、その人の性格やその人がその作品で伝えようとしていること表そうとしているものがよくわかった。
- みんなが作った作品の中の世界にいたら楽しいんだろうなと思いました。
- 同じでないといけないことはないということ、自分を誇っていいということ、この2つを大切にしたいと思った。

(2) ヒロガル・ブック

学期末には、授業でのヒロガルシートの中から、自分にとって大切な3枚を選び、自分にとっての意味や価値を再度構築する「ヒロガル・ブック」を作成する時間を作った。

- 5年生A児、ヒロガル・ブックで選んだ「山の学習、合唱祭、作品展」について
「美しい物がある3つだった」
- 5年生B児、ヒロガル・ブックで選んだ「平和集会、合唱祭、作品展」について
「みんなでつくるもの」
- 2年生C児、ヒロガル・ブックで選んだ「造形(手ざわりのあるお話)※1年時」について
わたしがいちばんすきなのはじぶんです。なぜならじぶんががんばってつくったのだからです。じぶんがこころをこめてつくった、がんばってつくったからじぶんのがすきです。わたしは、じぶんのもすきけどみんなのもすきです。なぜならみんなもがんばってこころをこめてつくったとおもうから、みんなのもすきです。へたの人もおるし、はじめてやる人もおるし、じょうずな人もおるからおもしろい。だからみんなのがすき。

本研究は授業の中での変容がゴールではない。〈他者〉を意識した授業の積み重ねの先に、造形で経験したよさや美しさ、人やものの多様さや多義的であることの実感が生活に息づいていくことを目指す。その一端をヒロガルの中に見つけることができた。

(文責 芦田 桃子)